

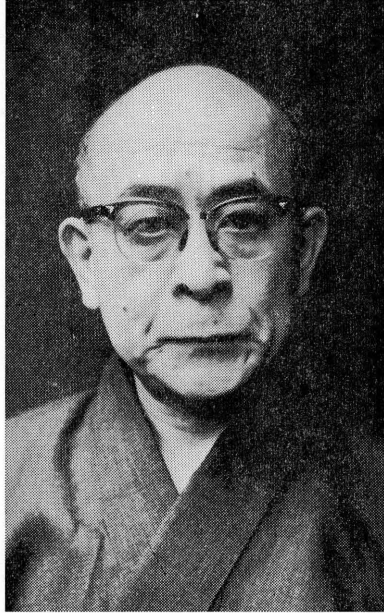
Title	奥野先生を偲ぶ
Sub Title	Memory of the late professor Shintaro Okuno
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.423- 425
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0423

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野先生を偲ぶ

村松 暎



奥野信太郎先生が亡くなってから、早いもので、もう間もなく一年になるうとしている。この特集号が出るころには、一周忌もすぎていることだろう。

先生の御逝去は、あまりに急なことだったので、私たちには先生がこの世におられなくなったということが、しばらくの間はなにか十分には納得できぬような気持ちだった。よくいわれるように、その辺からひょっこり姿をあらわしそうな気がした。静かに先生のことを追想できるようになったのは、最近のことである。

先生は街なかが好きだった。根っからの都会人だった。浅草の田舎臭さは好きだったが、田舎は嫌いであった。

「田舎っぺ」

というのが、先生の最大の侮蔑の言葉だった。東京生まれ、東京育ちでも、気に入らないと、

「あいつは田舎っぺだ」

といわれた。すべての判断が趣味を基準にしていた。私のような田舎者が、先生と長い間おつきあい願えたのは、考えてみると不思議な気がする。

苦勞もあつた。なにか学問上のことで、先生の意見を求める時にも、無粋にいきなりその問題を持ち出すわけには行かなかつた。なにか雑談をして、その方へ話を持って行くか、潮時を見はからつて切り出すかしなければならなかつた。

先生は細かい指導というようなことは、なさらなかつた。これも雑談の間に、談たまたま学問に及ぶのを、逃さずにとらえなければならなかつた。先生の話術に引きこまれて打ち興じ、うかとしていて、ついに忘れてしまうことも多かつた。勉強とすれば、無類に楽しい勉強であつた。

先生に中国文学の専門書の著作がないのも、同じ理窟から出ている。随筆家として通つていたし、御自分でも、随筆がお好きだつた。その随筆の中に、うまく学問をちりばめた場合が、先生の学問として成功した発表法なのであつた。

先生の研究発表を、一度だけうかがつたことがある。もう、十五年あまりも前、広島で中国学会の大会があつた時だつた。私は先生と御一緒して広島へ行つた。汽車の中で先生は、鞆の中をかきまわして、

「しまった、しまった」

といわれた。原稿を忘れてきたといふのであつた。

だから、発表は原稿なしだつた。それが『西遊記』鍛冶屋ギルド起原説であつた。研究発表を聞いている気はしなかつた。面白い講演といつた方がよかつた。御自身もそれが気に入らなかつた。

「どう、うまいもんだろ」

と自慢された。先生としては珍らしいことであつた。

門弟としては、先生が学説をまとめおかれなかつたことは淋しくもあり、残念でもあり、また自分中心に言えば不便でもある。だが、それが先生の方法であれば、なんともいたし方ないことだし、それでよいのだと思わずにもいられない。

先生は晩年、文学の中の“遊び”というテーマを考えておられた。学校の前の喫茶店で、ふとそのことを口にされた。亡くなってから、書齋の整理にお宅へうかがった時、日記の端にそのことを書いておられるのを発見した。これこそ先生にうってつけ、というのが適當でないならば、先生にやっておいていただかなければならない題目だったと思う。

いまさら取返しにつくことではないが、もう少しお体を大事にしていたら良かった。大事にさえすれば、まだ十分に長生き出来るお体だっただけに、そう思わずにはいられない。

「酒が飲めなくなったら、生きていたってしょうがない」

そういわれたことがあった。先生とすれば、そう思われたのも無理はないと私も思う。それでもやはり、生きていていただきたかった。生きてさえいて下されば、とさえ思う。いまとなっては、どう思っても致し方ないことはわかりきったことだが、それでもやはり、生きていていただきたかった、と思わずにはいられない。